

脳の機能障害

- 器質面で障害があるかも知れないが、脳波に異常がないということは、機能面で障害があると考えられる。
- 睡眠・食欲などに関して、コントロールが難しく、乱れることがある。脳内の神経伝達物質の働きが悪くなる。そのときに、気分障害が見られることもある。時にそう的、時にうつ的なようすが見られる。

全身に及ぶ障害

- 脳に障害があるということは、それが全身に及ぶことを意味します。知的障害というと認知面が弱いと考えられますが、それだけにとどまっているわけではありません。
- 自閉症の場合、認知の仕方が独特なので、考え方もずいぶん異なります。文化が違うという人もあります。

感覚が単一であるということ

- 見ているときは聞くことが、聞いているときは見ることが入りにくい。言葉によって行動することもあるが、言葉そのもので理解しているわけではなく、流れで行動していることがある。
- 生理の時は、生理の感覚に支配されてしまうので、よりいっそう環境面に配慮することが必要となる。耐性そのものが、落ちていると考えられる。

薬の効き方

- 神経伝達物質の働きが悪いので、効能書き通り、薬が効くとは限らない。また、よく効いていた薬でも、飲み続けると効かなくなることが見られる。逆の作用を起こすこともある。
- 薬を飲んだ本人からのフィードバックがあまり期待できないので、効いているかどうかの判断がつきにくいことがある。

ちらっと見るということ

- 相手と視線を合わせるということは、相手の視線を感じすぎてしまうので（自分が見るというより、見られるという意識が働く）、ちらっと見るみかたで普段は対応していることが多い。
- あまり見ていなくても、視覚的には鋭いものがある。見ていないようにみえても、案外見ていることが多い。

自動的な行動

- 音楽のリズムを聞くと、体が自動的に動いてしまい、ピョンピョン飛び跳ねたりしてしまふ喜んで行動しているのではない。また、すべての音にそう反応するわけではない。
- 単一の回路であるがゆえに、自動的な行動は起こりやすい。反射的に反応しているようなところがある場合もある。そんな場合は、落ち着かせることが必要である。

行動の言語

- 言葉があっても、コミュニケーションの手段として使えない。特に、話し言葉がない場合はなおさらである。行動をどのように理解するかが、コミュニケーションを図る方法となる。
- 話し言葉は消えてしまうので、確認するときは難しい面があります。目に見えて判る形で伝えることが大切となります。文字に書いたり、絵で示したりするのはそのためです。

不適切な行動

- 「行動の言語」ということから、不適切な行動をした場合に、その行動がどのような役割を果たしていたかを考えることによって、コミュニケーションを図るきっかけができます。要求・喚起・拒否・感覚に分類して整理してみるとよくわかると思います。それにより、適切な行動を導くカギが見つかります。

肯定的な関わり方

- 否定的な言い方では、何をどのようにしていいか判らず、かえって混乱をきたします。「..してはいけません。」と言っても、何の効果ももたらさないでしょう。それよりも、肯定的に「..してください。」と言う方が、効果があります。そして、その行動がとれたときは、大いに褒めることが次の行動の強化になります。それにより、よい循環に乗れます。

コントロールすること

- 自分が自分の体をコントロールすることが、時に難しいことがあります。俗に、手足がバラバラに動くということです。そんなときは、手足をこちらが押さえたりします。そして、自分の手足であることを再確認させます。最近では、ごろんと仰向けに寝かせて、動かずに50数えることがあります。

選択すること

- 選択することにより、自分の意志を動かせることができます。その場合には、選択しやすい条件を整えることが大切となります。視覚的にわかりやすくする工夫が必要です。
- 自己選択 自己決定ということが、自立の第一歩ではないかと思えます。ただ選択していても、本人が乗り気でないときもあります。

障害特性への理解

- 自閉症ということは、「対人関係の障害」・「コミュニケーションの障害」・「こだわり行動」の3つの点で、障害があるといわれています。
- 関わる際には、それらのハンディキャップに対して、いかに援助していくかということが基本となります。そのことにより、関係を持つことができるようになります。